

兵庫県北部におけるコブヤハズカミキリ類 2 種の交雑個体群

小林敏男¹⁾・中林博之²⁾・高桑正敏³⁾

¹⁾ 〒 244-0812 横浜市戸塚区柏尾町 1026-3

²⁾ 〒 940-2145 長岡市青葉台 5-3-6

³⁾ 〒 236-0031 横浜市金沢区六浦 3-16-9

Occurrence of a hybrid population between two phrissomine species (Coleoptera; Cerambycidae) in northern Hyogo Prefecture, central Japan

Toshio KOBAYASHI, Hiroyuki NAKABAYASHI & Masatoshi TAKAKUWA

兵庫県北部では、西にセダカコブヤハズカミキリ中国山地東部亜種 *Parechthistatus gibber daisen* Miyake et Tsuji (以下セダカと略) と見なされる個体群、概ね東にマヤサンコブヤハズカミキリ名義タイプ亜種 *Mesechthistatus furciferus furciferus* (Bates) (以下マヤサンと略) と扱われている個体群が分布している (草間・高桑, 1984; 武田, 1989; 長谷川, 2007 ほか)*¹⁾。ここでの 2 種の雑種個体は報告されてこなかったが、筆者らは現在の分布接点を突き止め、そこでは明らかな雑種集団が形成されていることを知った。また、豊岡市に分布するマヤサンのうち、円山川より西の個体群 (以下豊岡市型マヤサンと略) は、筆者らが確認できた全地域でセダカの形質を多少とも示す傾向が認められる。

本稿では、上記の雑種集団の形質的な特徴について記載することとするが、一方、筆者らの知り得た分布接点は非常に狭い場所であり、興味をもつ方が多く訪れた際には過度の採集圧をはじめとした弊害も予測されるので、分布面の詳細は述べないこととする。

本文に先立ち、逗子市の露木繁雄氏、横浜市の鎌刈哲二氏にはともに現地調査を行う中でお世話になった。綾部市の阿部利一氏は兵庫県下のコブヤハズ類 2 種の詳細な分布調査結果を、また山形市の永幡嘉之氏と三田市有馬富士自然学習セン

ターの中峰空博士は当地の重要な情報を教えてくださった。さらに、宝塚市の松田潔氏には貴重な標本を長期間に渡って借用し、日本大学生物資源科学部の岩田隆太郎教授には文献面で協力いただいた。これらの方々には心からのお礼を申し上げる。

1. 兵庫県北部におけるセダカとマヤサンの分布

兵庫県北部における 2 種の分布態は、最近の採集情報に基づくなら、大局的には西側を中心とした広い地域にわたってセダカ (中国山地東部亜種) が分布し、東に位置する豊岡市の一部と丹後山地にマヤサン (名義タイプ亜種) が分布すると考えられる。

日本海に面した一帯では、セダカは美方郡に広く記録され (佐藤, 1996 など)、豊岡市西部 (武田, 1989) まで分布する (筆者らも後述の採集記録のとおり同様な結果を得ている)。これに対し、マヤサンは丹後山地方面から円山川を越えて豊岡市竹野町字峠・日高町神鍋山 (武田, 1989)、豊岡市野垣・城崎町 (佐藤, 1996) などから記録され、筆者らも豊岡市型マヤサンを旧豊岡市、城崎町、日高町で採集している (後述の採集記録のとおり)。

さらにマヤサンは、セダカ分布圏の中に含まれる香美町三川山 (高橋, 1976) や新温泉町扇ノ山 (辻, 1972)、養父市氷ノ山 (大倉・遊磨, 1974) からも記録されているので、武田 (1989) はこれらの地域において 2 種の混棲を想定しつつも、採集記録が古いこと、かつ最近の記録がないことから、それらの地ではマヤサンが衰亡してしまった可能性に言及している。

2. セダカとマヤサンの形質差

通常、種セダカコブヤハズカミキリと種マヤサンコブヤハズカミキリとは、上翅基部に 1 対の小顆粒列をもち、中央が顕著に隆起して黒紋をもた

*) 三宅 (1980) は日本のコブヤハズカミキリ類を再検討した中で、鳥取県大山産をホロタイプとして subsp. *daisen* Miyake et Tsuji を記載し、兵庫県北西部 (扇ノ山、氷ノ山) の個体もこのタイプシリーズに含めた。また、マヤサンについては亜種分けを採用しない一方で、飛騨山脈、北陸地方、京都・滋賀県の 3 つの個体群に分け、Hayashi (1951) が奈良県 Mt. Ohmine 産をホロタイプとして近畿～中部地方から記載した subsp. *meridionalis* を北陸地方産に当てた。さらに、検索表の中で北陸地方産を上翅端の突出部の状態から、石川・福井県産と京都府丹後地方産とに分けている。

ない(前種)か、1対の大顆粒をもち、中央がそれほど隆起せずに黒紋をもつ(後種)か、などによって明瞭に区別できる。しかし、セダカと見なされる個体群とマヤサンと扱われている個体群は、少なくとも兵庫県北部周辺での形態差はときに必ずしも明らかではないうえ、共に地域変異と個体変異が多少とも認められるので、まず双方の基本的な形質差を示しておきたい。この材料としては、セダカは本亜種のタイプロカリティである鳥取県大山産に加え兵庫県北部産(図1, 2)を、マヤサンは丹後山地産(朝来市産と京都府福知山市産:

図3, 4)を用いた。ただし、上翅基部の1対の大顆粒ないし小顆粒列を例にしても、前者では兵庫県北部産に大顆粒を現す(=マヤサンの重要形質の1つ)個体が見られる(中林, 2008)一方、後者では小さく分割した顆粒群をもつ(=セダカの重要形質の1つ)個体が出現するので、両個体群とも過去に他方と遺伝子の交流があった可能性もある。

両種の形質的違いとして、多少とも顕著で比較的安定し、また理解しやすいものは、上翅の形状、つまり基部の1対の顆粒(群)、背面の隆起と側方

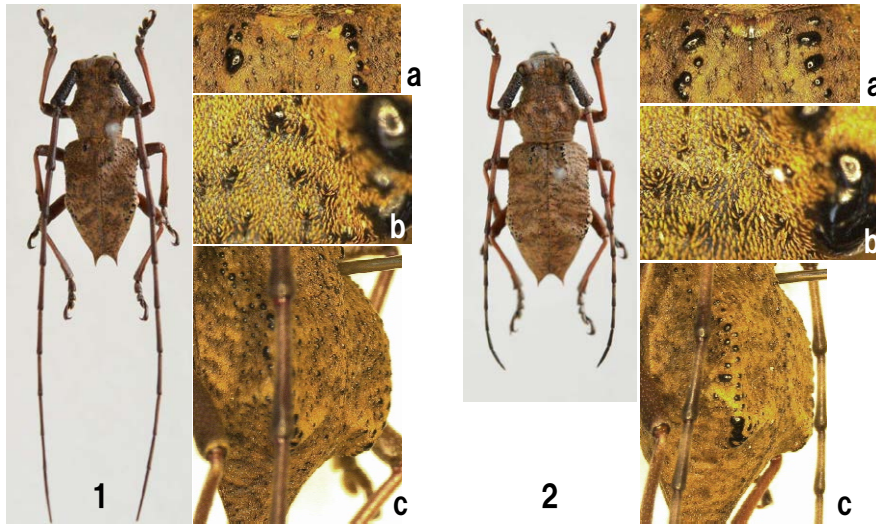


図1-2. セダカコブヤハズカミキリ中国山地東部亜種*Parechthistatus gibber daisen* Miyake et Tsuji (兵庫県豊岡市産)。1, ♂; 2, ♀; a, 上翅基部の顆粒の状態; b, 右斑紋部; c, 上翅隆起部(左斜め上より)。

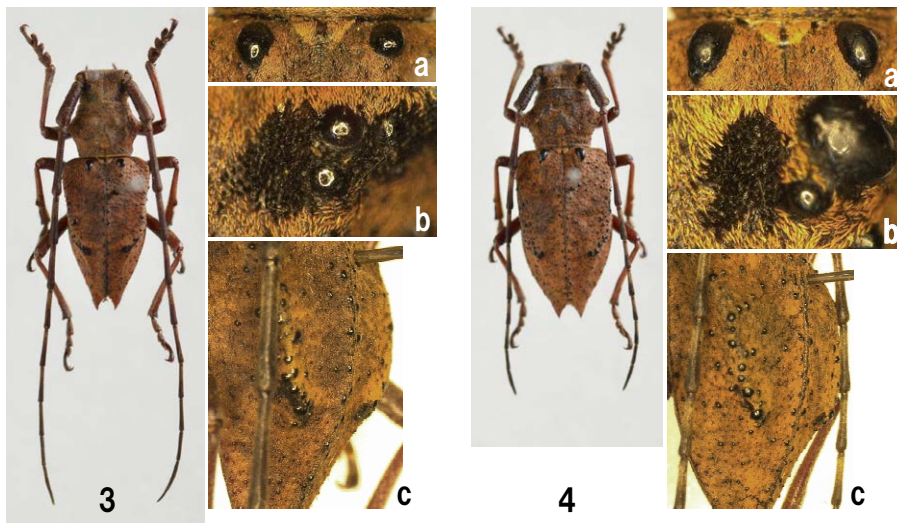


図3-4. マヤサンコブヤハズカミキリ名義タイプ亜種*Mesechthistatus furciferus furciferus* (Bates) (京都府大江山産)。3, ♂; 4, ♀; a, 上翅基部の顆粒の状態; b, 右斑紋部; c, 上翅隆起部(左斜め上より)。

への広がり、背面両側の角稜後端（以下、側稜後端と記述）部分、斑紋部分、後方の小顆粒群の出現状態、それと触角の色彩が認められた。以下に違いを記すが、下線部はその種の基本的な形質と考えられる。

なお、両種の差として、セダカはマヤサンに比べ、前頭の前縁直前の溝はほぼ直線状（後種は正中中部でやや高まる）；上翅肩部は多くがなで肩状（後種は多くが怒り肩）；上翅側縁を側面から見ると、中央から後方に向けて直線的ないし弧状にえぐられて下降する（後種は全体ほぼまっすぐに水平状のものから、基部後方～中央へ高まり、それから端まで水平、もしくは直線的～弧状に下降するものまで変化が大きい）；上翅端はより広く、また半円状に開く個体がある（後種はより狭く、三角形状に開く個体が多い）；触角と肢はより細くて長い傾向がある；など見られるが、対比した場合に明らかな差異とは認めにくいので、ここでは割愛した。

(1) セダカ（中国山地東部亜種）の特徴的形質

[検視標本] 鳥取県大山：1♂，8. VI. 1968，杉野広一採集；1♀，同，正木清採集；1♂，28. VI. 1970，三蔭外茂治採集；2♂♂1♀，5. V. 1998，A. Yoshida leg.；1♂1♀（飼育），VI. 2005，松本裕一採集；1♀，9. VII. 2005，高桑採集。兵庫県新温泉町扇ノ山：1♂1♀，30. IX. 2006，中林採集；1♂1♀，17. X. 2006，小林採集；1♀，同，鎌苅哲二採集。兵庫県氷ノ山：1♂，7. VI. 1972，Y. Komai 採集。兵庫県豊岡市：1♂2♀♀，三川権現，14. X. 2002，小林採集；1♂，竹野町三原，16. X. 2010，小林採集；1♀，同，16. X. 2006，小林採集；3♂♂3♀♀，竹野町床瀬奥山，28. X. 2006，中林採集；2♂♂1♀，同，11. XI. 2007，中林採集；1♂，同，11. X. 2009，小林採集；1♂2♀♀，日高町稲葉，12. IX. 2009，小林採集；1♂1♀，同，19. IX. 2009，小林採集；3♂♂1♀，同，19. IX. 2009，高桑採集；1♂2♀♀，同，3. X. 2009，小林採集；1♂2♀♀，日高町稲葉川上流蘇武岳，18. X. 2006，小林採集。

上翅基部の顆粒（群）：それぞれ数個の小～中顆粒が現れる（しばしば左右非対称；稀に大顆粒をもつ）。

背面の隆起の状態：肩部は強く凹陷し、基部後方で急に隆起して中央部分は台地状で浅く不規則に横しわ状、端方へ急降下する；会合部はほとんど隆起しない。

上翅の側稜：肩後方でいきなり弧状に高まり、中央の台地状部分では多少とも外方に弧状にふくらむ（稀に直線状にわずかに狭まる）ため、背面からは上翅側縁が隠れるか、わずかに認められる程

度（ただし竹野町産1♀は明らかに認められる）；後端は高い崖状（ときにオーバーハング状、あるいは低い崖状；しばしば盛り上がった地肌が連結して丘状を呈する）、急降下して側稜は消失するが、ときに低く短い丘状隆起が続く；崖上部からは斜め内前方へ弱くゆるやかな丘状隆起（淡白褐色紋を伴う）が延び、ときに会合部に近づく。

上翅の斑紋：多少とも不明瞭な淡白褐色紋が内方へやや斜め前方に長く伸びる（ときにほとんど認められない）。

上翅後方の小顆粒群：基本的に中央隆起より後方には出現しない（稀に少数の微小顆粒が現れる）。

触角の色彩：第1，2節はほぼ黒色（ときに2節は赤みがかかる），3節以降は黒褐色～暗赤褐色（雌でより赤みがかかる傾向がある）。

(2) マヤサン（名義タイプ亜種：丹後山地産）の特徴的形質

[検視標本] 兵庫県朝来市和田山糸井溪谷：3♂♂1♀，12. X. 2002，小林採集。京都府福知山市大江山産：14♂♂13♀♀，13. X. 2013，高桑採集。

上翅基部の顆粒（群）：1対の大顆粒が現れる（ときに左右非対称，2～数個に分割されるものも出現）。

上翅背面の隆起の状態：肩部はやや強く凹陷するが、中央部へと滑らかに（多くは会合部と側稜部の間で縦に浅く凹陷しながら）隆起し、中央隆起からは後方へと滑らかに降下する；会合部はとくに中・大型個体の雄で隆起するが、♂小型個体と♀ではほとんど隆起しない。

上翅の側稜：肩後方でやや急に高まってから水平となり、そのまま後端部から内斜め後方に短く伸びて消失する；中央隆起部では両側で広がることなく、平行または後端に向けて狭まるため、背面から上翅側縁が明らかに認められる；後端の崖状部分は低くて傾斜はゆるやか、後方へはなだらかな丘状隆起が走るが、ときに不明瞭。

上翅の斑紋：上翅中央直後の隆起部には前方に多少不明瞭ながらも淡褐色紋、後方～内方に黒色紋が現れる（稀にごく小さい）。

上翅後方の小顆粒群：会合部沿いのほか、丘状隆起上や側面にも出現するが、ときに疎らあるいは微小顆粒のみ。

触角の色彩：第1，2節はほぼ赤褐～黒赤褐色，3節以降はより暗色～黒色（稀に全体がほぼ黒色），もし3あるいは4節がより明色であっても5節以降はより暗色～黒色。

3. 豊岡市型マヤサンの形質

[検視標本] 城崎町来日岳：5♂♂1♀，13. X. 2002，

小林採集;1♀, 9. XI. 2007, 中林採集;1♂1♀, 10. X. 2009, 中林採集, 奈佐森林公園;2♀♀, 19. IX. 2009, 高桑採集, 日高町大岡山;2♂♂, 29. X. 2006, 中林採集;1♂1♀, 19. IX. 2009, 中林採集;1♀, 19. IX. 2009, 高桑採集;2♂1♀, 11. X. 2009, 中林採集, 日高町大岡山山頂;9♂♂1♀, 12. X. 2013, 高桑採集.

上記の29個体を検討した。大部分は上翅に明瞭な黒紋を生じ、かつ基部に大顆粒を現すことから、一見してマヤサン個体群に思える。大岡山産1♀にはかなり特異な黒紋(側稜後端の内側で大円紋となる)を示すものもあった。ただ、黒紋が著しく小さいものが3頭もあるほか、次のようにセダカの形質を反映していると考えられる特徴も示す個体が少なからず認められるので、丹後山地産と比較すると、よりセダカの形質を発現させていると言える(図5, 6)。

上翅:基部の大顆粒が分割したものがあ;中央の隆起部が多少とも高まり、会合部は隆起しない個体がかんり認められる;側稜は中央隆起部で弧状にわずかに両側ふくらみ、背面から上翅側縁がほぼ認められないか、かろうじて認められるもの若干あり;側稜後端から後方に延びる丘状隆起がほとんど認められず、むしろ内方へ長く低い隆起が延びる傾向が見られる;側稜後端が短いながら崖状を呈するものがある;上翅後方にごく少数の微小顆粒しか発現しない個体がある。

触角:第1節がほぼ黒色を呈するものが稀でない。

4. 2種の分布接点における雑種個体群

前述したように、兵庫県北部では基本的にセダ

カとマヤサンは側所的な分布傾向を示すようであるが、筆者らは両種のごく狭い交雑地点を認めた。ここで得られた51個体を見るかぎりでは、明らかに双方の形質を併せ持った個体、ないし中間の形質を多少とも示す個体が大部分を占めており、雑種集団を形成していると判断される。

[検視標本] 兵庫県豊岡市;3♂♂1♀, 12. IX. 2009;2♂♂1♀, 19. IX. 2009;6♂♂2♀♀, 3. X. 2009;2♂♂, 11. X. 2009;1♂1♀, 19. X. 2009;2♂♂, 16. X. 2010;3♂♂1♀, 30. IX. 2013;2♂♂, 1. X. 2013;1♂1♀, 2. X. 2013, 以上小林採集;2♂♂3♀♀, 11. X. 2009, 中林採集;3♂♂3♀♀, 19. IX. 2009;2♂♂2♀♀, 11. X. 2009;2♂♂1♀, 12. X. 2009;4♂♂, 12. X. 2013, 以上高桑採集.

これらのうち、セダカは6個体(1♂, 12. IX. 2009, 小林採集;2♀♀, 19. IX. 2009, 小林・高桑採集;1♂1♀, 11. X. 2009, 中林・高桑採集;1♂, 30. IX. 2013, 小林採集)のみで、残り45個体は上記豊岡市型マヤサンないし明らかに両種の雑種と判断される。

この45個体を検討すると、上翅側稜後端部に多少とも黒紋を現すものが43個体(6-7個体は痕跡的)も含まれ、上翅基部に大顆粒が現れるものや、触角第1, 2節が多少とも赤味がかかるものが大部分なので、一瞥するとマヤサンの個体が多い。しかし、上翅基部の大顆粒は小さいか、2~数個に分割され、また左右で状態が大きく異なるなど乱れた個体が多く、また中央隆起部も台地状を呈するもの、側稜後端部において背面から側縁が見えないもの、側稜後端部から後方へと続く丘状隆起が認められないもの、逆に内方へとごく低い

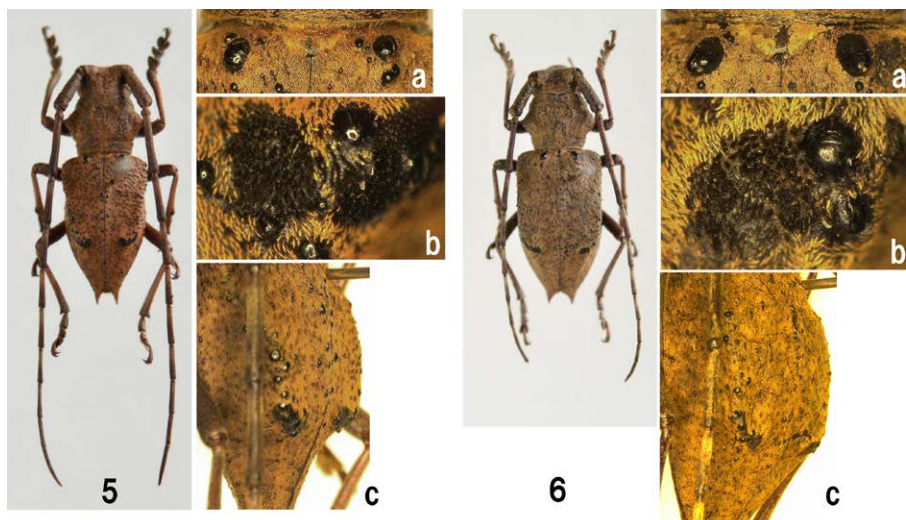


図5-6. 豊岡市型マヤサンコブヤズカミキリ。5, ♂;6, ♀;a, 上翅基部の顆粒の状態;b, 右斑紋部;c, 上翅隆起部(左斜め上より)。



図7-10. セダカコブヤハズカミキリ×マヤサンコブヤハズカミキリ. 7-9, ♂; 10, ♀; a, 上翅基部の顆粒の状態; b, 右斑紋部; c, 上翅隆起部(左斜め上より).

丘状隆起が連なるもの等々、セダカの形質もしくはセダカとの中間的な形質を示す個体がほとんどである。一方、黒紋を現さないものはわずか2個体(1♂1♀)であった。この♂は上翅基部の片方に大顆粒を備え、側稜後端からの崖状部分がごく低く、上翅後方に小顆粒が散在するなど、通常のセダカとは異なる形質を併せ持つ。♀は上翅基部に左右とも中顆粒を縦に2個備え、中央隆起部は弱く、側稜は内後方へ向かうので背面から側縁が明らかに望め、側縁後端からは内に延びる低い丘状隆起は認められず、また崖状部分は斜めとなってそのまま後方へ降下、上翅後方には小顆粒が散在するなど、セダカとは明らかに異なる形質を持つ。

以下に、明らかに雑種と判断される4個体について写真で示す(図7-10)とともに、その特徴を

記しておく。

A(図7):♂(12.X.2013,高桑採集),体長18.8mm.

上翅:基部の大顆粒は左右とも数個に分割される【中間的】;黒紋が側稜後端部沿いに細く出現するが、黒紋を形成するパイプ状毛はややまばら【マヤサンの】;中央の隆起部は台地状に高まり、会合部は隆起しない【セダカの】;側稜は中央隆起部で弧状にわずかに両側ふくらみ、背面から上翅側縁が認められない【セダカの】;側稜後端から後方に延びる丘状隆起が短いながら認められ【中間的】、内方へ低い丘状隆起が延びる【セダカの】;側稜後端は短い崖状【中間的】;上翅後方は会合部に数個の微小顆粒をもつ【中間的】.

触角:第1,2節はほぼ黒色【セダカの】、3節以

降明色となるが端3節は黒色。

B (図8): ♂ (19. IX. 2009, 高桑採集), 体長 15.3 mm.

上翅: 基部の大顆粒は左右とも小さく, 後方に左は2個, 右は1個のそれぞれ小顆粒を備える【中間的】; 黒紋が側稜後端部にいくつか分離して出現するが, 黒紋を形成するパイプ状毛はまばら, 黄褐色がかかるものを混じり, 内方の1対だけが大きい【固有的】; 中央の隆起部はやや台地状に高まり, 会合部は隆起しない【セダカ的】; 側稜は中央隆起部で弧状にわずかに両側ふくらみ, 背面から上翅側縁がほぼ認められない【セダカ的】; 側稜後端から後方に延びる丘状隆起は認められない【セダカ的】; 側稜後端はやや緩やかな崖状【中間的】; 上翅後方は微小顆粒を欠く【セダカ的】。

触角: 第1節はわずかに赤みがかった黒色【中間的】, 2節以降暗赤褐色だが端方に向かうにつれ黒色。

C (図9): ♂ (12. X. 2013, 高桑採集), 体長 14.8 mm.

上翅: 基部の大顆粒は左右とも小さく, 背方に高く突出し, 後方に1-2個の小顆粒を備える【中間的】; 黒紋が側稜後端部に明瞭に出現する【マヤサンの】; 中央の隆起部は基部方面から緩やかに高まるが台地状を呈し, 会合部は隆起しない【中間的】; 側稜は中央隆起部で直線的にわずかに狭まるが, 背面から上翅側縁が認められない【中間~セダカ的】; 側稜後端部は全体にやや隆起し, 側稜はそのまま後方へまっすぐ降下, 内方へは隆起がほとんど認められない【以上すべて固有的】; 上翅後方は小顆粒を備える【マヤサンの】。

触角: 第1, 2節とも赤褐色【マヤサンの】, 後方に向かうにつれ暗~黒色。

D (図10): ♀ (11. X. 2009, 高桑採集), 体長 18.0 mm.

上翅: 基部に左右とも大顆粒をもつ【マヤサンの】; 黒紋が出現【マヤサンの】, ただし側稜後端より内側に位置し, 黒紋を形成する毛はむしろへら状, 斜立してやや短い【固有的】; 中央の隆起部は低いが台地状に高まり, 会合部は隆起しない【セダカ的】; 側稜は中央隆起部で両側平行, 背面から上翅側縁がわずかに認められない【セダカ的】; 側稜後端部は短いが明らかな崖状【中間~セダカ的】, 後方に延びる丘状隆起を欠き, 内方へ低い丘状隆起が会合部近くまで延びる【セダカ的】; 上翅後方は会合部はじめ少数の小顆粒をもつ【マヤサンの】。

触角: 第1, 2節は黒赤褐色, 2節と3節基半は赤褐色, それより後方へ次第に暗色~黒色【マヤサンの】。

5. 考察

(1) 雑種集団の存在

兵庫県豊岡市の1ヶ所において, セダカとマヤサンの交雑個体群を認めた。ここでは51個体が得られたが, この内訳としては, セダカの通常の特徴をもつ6個体以外は, 明らかに両種の間の特徴を示す個体, ないし双方の特徴を併せ持つ個体, それに一見するとマヤサンのだがセダカの形質を多少とも示す個体(豊岡市型マヤサン)であった。

A. セダカの採集数が少なかったことから, 両種は出会えば容易に交雑してしまう可能性が高い。ただし, 兵庫県下では一般にセダカは秋季における採集数が初夏よりも少ない(阿部利一氏・中峰空博士による)ので, 実際にはより多くのセダカが存在しているかもしれない。

B. 雑種個体には, 両種の間の特徴的なものから, セダカあるいはマヤサンに偏った形質を示すものまで見られるため, ここでは両種への戻し交雑を含めて多様な雑種相が生じていると考えられる。

(2) 豊岡市型マヤサン

豊岡市を南から北へと流れる円山川の西側に豊岡市型マヤサンが分布しているが, これらを丹後山地産マヤサンコブヤハズカミキリと比較すると, セダカの形質を多少とも示す個体が多い。このことから,

C. 豊岡市型マヤサン個体群は, 過去にセダカと交雑し, 遺伝子浸透を生じてしまった可能性が高い。現在はマヤサンの形質に収斂しつつあると考えられる。

(3) セダカとマヤサンの分布動態

(1)の雑種集団は面積的にかなり狭く, その一端ではごく少ないながらも通常のセダカだけが得られているようである。また, その反対側などでは豊岡市型マヤサンの分布圏となっているように思える。このことから,

D. 雑種集団の形成は, セダカが分布していた場所に豊岡市型マヤサン個体群が進出したためと推定できる。言い換えるなら, 後者はセダカ個体群を遺伝的に取り込みながら, 分布域を拡大している可能性が高い。

E. 上記の見解が正しいとすれば, 豊岡市型マヤサンの由来は次のように解釈可能である。すなわち, かつてセダカの分布圏であったが, マヤサンが丹後山地から円山川を越えてその西側地域に進出し, そこに分布していたセダカを遺伝的に取り込みながら置き換わったもの。

ただし, ここでの問題は, セダカ分布圏が広がる兵庫県北西部の三川山, 扇ノ山, 氷ノ山からマヤサンの記録があること(前述)である。これを

基盤を考えるなら、また別の解釈も可能であるし、兵庫県北部のセダカには上翅基部に1対の大顆粒をもつ点をはじめ、一部にマヤサンの特徴形質を示す個体が少ないながら出現することも理解できる。一方、兵庫県北西部におけるマヤサンの最近の確認情報はないと思われること、両種がこれらの地域でモザイク的にせよ、同所的あるいは側所的に分布していたとは考えにくいことから、マヤサンの記録が何らかのミスまたは偶然に基づくという考え方も捨て切れない。

いずれにせよ、兵庫県北西部における今後のさらなる詳しい分布調査が必要であろう。

引用文献

- 長谷川道明, 2007. コブヤハズカミキリ族. 大林延夫・新里達也編, 日本産カミキリムシ, pp. 303, 570-576. 東海大学出版会, 秦野.
- Hayashi, M., 1951. Studies on Cerambycidae from Japan and its adjacent regions (1). Ent. Rev. Japan, 5(2): 75-82.
- 草間慶一・高桑正敏, 1984. フトカミキリ亜科 (*Asaperda*, *Rhodopina*, *Exocentrus*, *Sphingothorax*, *Planeacantha*, *Sciades*, *Phloeopsis*, *Boninella* を除く). 日本鞘翅目学会編, 日本産カミキリ大図鑑, pp. 352-368, 374-462, 467-493, 511-549. 講談社, 東京.
- 三宅義一, 1980. コブヤハズカミキリ類の分化と分布. 北九州の昆蟲, 27(2): 61-84, pls. 5-6.
- 中林博之, 2008. コブヤハズカミキリ入門. 高桑正敏の解体虫書, pp. 76-104. 華飲み会, 小田原.
- 大倉幸彦・遊磨正秀, 1974. カミキリムシ科. 奥谷禎一編, 東中国山地自然環境調査報告, pp. 216-222. 兵庫県, 岡山県, 鳥取県.
- 佐藤邦夫, 1996. IRATSUME に採集記録が発表された但馬のカミキリムシ. *Iratsume*, (20): 93-109.
- 高橋 匡, 1976. 豊岡高等学校昆虫標本日録第4報, p. 11. 兵庫県立豊岡高等学校.
- 武田 滋, 1989. コブヤハズカミキリ類の分布 (兵庫県の巻). *Came 虫*, 8(2): 10-12.
- 辻 啓介, 1972. 兵庫県のカミキリ. 月刊むし, (10): 16-22.

(2014年4月30日受領, 2014年8月12日受理)

【短報】オキナワケシデオキノコムシの渡嘉敷島からの採集記録

筆者は2014年3月26日に沖縄県渡嘉敷島で落葉層に生息する菌食性コウチュウ類の調査を行った。渡嘉敷島におけるハネカクシ科デオキノコムシ亜科の従来の記録はほとんどない。本調査にてオキナワケシデオキノコムシ *Scaphisoma conforme okinawaense* Löbl, 1982 を採集できたので記録したい。

1♂, 沖縄県渡嘉敷島久比里原林道, 26. III. 2014, 保科英人採集。

本種は Löbl (1982) によって、沖縄本島与那を基準産地として、台湾産種 *S. conforme conforme* Löbl, 1980 の沖縄産亜種として記載された。沖縄本島では特に珍しい種ではないが、多くの周辺離島からは記録がない。

琉球列島では、*Scaphisoma* 属などのいわゆる小型デオキノコムシ類は立ち枯れや倒木のピーティングよりも落ち葉ふるいの方が一般的に効率よく捕れる。筆者個人の経験談で恐縮だが、かつて奄美大島での1時間程度の土ふるいで100頭を超す *Scaphisoma* 属を採集したことがある。しかし、今回の渡嘉敷島における調査では、本稿で報告するオキナワケシデオキノコムシのほかは、数個体の未同定の *Scaphisoma* 属が捕れたにすぎない。また、同じく菌食性タマキノコムシ科や捕食性のハネカクシ科コケムシ亜科なども捕獲されたのは10頭以下だった。渡嘉敷島の土壌性ハネカクシ上科相は、

同じ沖縄本島周辺の離島である久米島のそれと比較すると貧弱であると推察される。

引用文献

- Löbl, I., 1982. Über Scaphidiidae (Coleoptera) der japanischen Ryukyu-Inseln. Mitteilungen der Schweizerischen entomologischen Gesellschaft, 53: 101-105.

(保科英人 福井大学教育地域科学部)